



19世紀初期スコットランド小説におけるナショナルアイデンティティの表象

1. はじめに

「英文学」として知られるスコットランド小説は、19世紀初期にイギリスとスコットランドの両国で盛んに行われた。この小説は、スコットランドの歴史、文化、社会を描き、スコットランド人のアイデンティティを表現する役割を果たした。スコットランドは、1707年の合同によってイギリスと合併したが、その後も独自の文化とアイデンティティを維持し、スコットランド小説を通じてそのアイデンティティを表現した。

2. スコットランド文学

1707年にイギリスとスコットランドが合併した。この合併は、スコットランドのアイデンティティに大きな影響を与えた。スコットランド人は、この合併を「失われたアイデンティティ」として捉え、スコットランド小説を通じてそのアイデンティティを表現した。スコットランド小説は、スコットランドの歴史、文化、社会を描き、スコットランド人のアイデンティティを表現する役割を果たした。スコットランド人は、この合併を「失われたアイデンティティ」として捉え、スコットランド小説を通じてそのアイデンティティを表現した。

スコットランド小説の代表作家として、アーサー・コナン・ドイル（Arthur Conan Doyle, 1859-1930）の『ジキル博士とハイド氏の怪事件』（Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde）が有名である。また、ロバート・ルイス・ステvenson（Robert Louis Stevenson, 1850-1894）の『パイプ・パンの物語』（The Piper's Pan）や、ジェームズ・バリー（James Barrie, 1860-1937）の『ピーター・パン』（Peter Pan）も有名である。最近では、アラスター・グレイ（Alasdair Gray, 1934-2019）の『貧乏な人々』（Poor Things）が話題になった。これらの作家は、スコットランドの歴史、文化、社会を描き、スコットランド人のアイデンティティを表現する役割を果たした。

3. 19世紀初期のスコットランド小説

1707年の合同に反発する勢力はイギリス政府に対して何度か反乱を起こします。最大にして最後の大規模な内乱は、1745年のジャコバイト蜂起でした。ジャコバイト（Jacobite）とは1688年の名誉革命でイギリスを追放されたチャールズ二世の支持者で、特にスコットランドのハイランド地方に多く存在しました。1745年の反乱は失敗に終わり反逆者たちは政府軍によって徹底的に虐殺され、その後の政策によってハイランドの人口は激減しその文化は急速に衰退の一途を辿りました。

1745年の反乱の後に生まれたウォルター・スコット（Walter Scott, 1771-1832）はハイランドではなくロウランド地方の出身ですが、曾祖父が熱烈なジャコバイトだったこともあって、1814年にこの事件を描いた小説（最初の歴史小説ともいわれます）『ウェイヴァリー』（Waverley）を出版します。主人公ウェイヴァリーはイングランド人の青年で、彼は好奇心とロマンスへの憧れからハイランドを訪れジャコバイトに加わりますが精神的な成長を経て反乱軍を離脱し、こう述懐します。

“the romance of his life was ended, and [...] its real history had now commenced”

「自分の人生のロマンスは終わり、真の歴史が今始まったのだ」

滅びゆくハイランドの文化を深い哀惜と共感を込めつつ描き出す一方で、イングランドと合同した「現代」を肯定するというスコットの均衡のとれた姿勢が読者の共感を呼び、同作はスコットランドにとどまらず世界的な熱狂を巻き起こし、ハイランド文化への人々の関心を一躍高めました。そして出版から8年後の1822年、ジョージ4世（George IV, 1762-1830）が連合王国の君主として初めてスコットランドを訪問し、その歴史的行事の演出を任されたスコットは国王にハイランドの象徴であるタータンキルトを着用させ、両国の融和を人々に強く印象付けました。小説を通して自国の文化を守り伝えたスコットの功績は、国民意識の形成と文学の双方向的な影響関係を示す強力な一例と言えるでしょう。

本研究はJSPS科研費(23K12120)の助成を受けたものである。